

「生き方を学ぶ性教育」平成10年1月

P. 2

(2) 生と死、生命の大切さを

- ・今日の子どもたちの言動を見ると、自他の生命を軽視した行動が目立ってきている。
- ・死を安易に受け止めている例も少なくない。
- ・柏手の立場を思いやる心に欠けて、友達を死に追い詰めてしまう例もある。

(3) 自己を見直し、自己コントロールをする力を

- ・人間である限り、私たち大人にも自分でも認めたくない醜い感情というものがあり、子どもたちにも親や教師に知られたくない秘密がある。
- ・どんな社会にもダークサイドは存在する。→これに気付いた時、どう対処していくかが問題

生き方を学ぶ性教育の推進

生命の大切さを実感→生と死に関すること、生命を尊ぶ心

生き方を学ぶ性教育とは、性教育という1つの学習を窓口にして、生き方を学ぶ教育である。

そのためには主体的に判断できる場面をつくること、自らをよりよくするためにはどうするのかを考えさせる教育活動を展開しなければならない。

P11 生命の大切さを実感すること

生命の誕生から死に至るまでの過程を理解し、生命のかけがえのなさを自覚させることが重要である。人間の誕生の喜びや死の重さ、生きることの尊さを知り、自他の生命を尊重して生き抜こうとする心を育てること

P11 人間としての生き方の根源

- ①生きていることのすばらしさや喜びを味わわせる
- ②生きがいを持たせる
- ③生命や自然に対する畏敬の念を培う
- ④自他の生命の尊重や、動植物を悲しむ心

P11 生きることの重要性・意義を知り、弱者への思いやりを育てる生命教育であり、正しい感情、個性の伸長と子どもの健全育成を図る。「生と死」を考える

P11 生命の依存性

自然界の生物は、すべて他の生物の犠牲に依存して自己の生命を維持している。

「食物連鎖」は、生物が単独ではできないこと如実に示す事実であるとともに、生命の等価性と連続性や、生物が自然の大きな力によって生かされている事実を実感させてくれる。

P12 生と死について

- ・生と死は表裏一体の関係であり、生を取り扱えばその裏として、死を考えることになります。
- ・「生と死」の教育を行う場合の大切なことは、子どもたちの発達段階にそってその問題を取り扱わなければいけません。
- ・たくさんの小さな喪失体験を上手にのり越え、立ち直っていくことで、人生でもっとも大きな喪失をうまくのり越えられるのです。

アルフォンス・デーケン「死の準備教育の4つのレベル」

- 1 知識伝達のレベル：死にかかわる学術的な研究成果の多様な専門知識を学ぶ
- 2 価値解明のレベル：自分の価値観の見直しと再評価を行い、生と死に関するしっかりとした価値観を身につける
- 3 情緒及び感情的なレベル：死に対して抱いている過度の不安や恐怖を自覚、克服する
- 4 技術取得のレベル：死にゆく患者とのふれあいを通じて、具体的な技術の習得を行う

P13 生と死に関する内容

1 生命尊重に関すること

死の不可避性に気づき、今の自分以外の存在の命のかけがえなさを感得できる

2 生き方に関すること

- (1) 死を正しく受け入れる
- (2) 生の意味をとらえる・・・生きることの素晴らしさを知る
- (3) 充実して生きるようにする・・・人生の重要な選択の時に、将来を十分に展望した判断をするようになる

3 人格に関すること

- (1) 健全な人格形成の育成を図る 死について知ることによって死にゆく人の悲しみ、悲嘆にくれる人々の気持ちを知るようになる
- (2) 自己を再び発見する
- (3) 思いやりの心を育成する・・・生命の尊重としての弱者への思いやり
- (4) 価値観を形成できるようになる・・・生と死という大切な問題から逃げるのではなく、

自ずから決定しうる人間、固有の価値を創造できる人間を生み出すこと

4 予防に関すること

(1) 悲しみ、死への準備をする

死が訪れても、その時あわてふためかないように、生きるための学習の中で、死への準備をそれぞれの年齢や環境に応じて導入し、また日常の生活の中でも、そうした危険的状况に対応できる精神訓練をしておく必要がある

(2) 自殺を予防する

充実した人生を送ることの大切さを感得するうちに、自殺予防の意義にも目をむける

5 平和に関すること

戦争で生命が失われることに対する生命尊重を考える

P14 生命を尊ぶことについて (生命尊重の具体的な目標)

- | | |
|---------------|--|
| 見つけよう、生命を尊ぶ心 | 人間以外にも命あるものが数限りなく存在している。
命を大切にすることをしっかりと身につける必要がある。 |
| 大切にしよう、生命を尊ぶ心 | 子どもたちの生活の中に、生命は大切なものだという実感を得ることができる体験の機会が失われてきている。 |
| 高めよう、生命を尊ぶ心 | 生命を尊ぶ心や生命に対する畏敬の念は、ときには偶然の機会に感得することがある。 |

P15 学校教育の中で「生と死」についてどのような取り組みができるのでしょうか。

1 いのちはつながりあっているということ

横のつながり：いのちを食べていのちは生きていること、食物連鎖、生物のささえあい

縦のつながり：地球の歴史、生命の発生と発展、人間の歴史、動植物の世代交代

2 いのちの誕生：生命誕生のドラマ

3 いのちの一生・生まれて、育って、死ぬいのちのこと

若いいのちと老いるいのちのささえあい

4 いのちの不思議さ・いのちのメカニズム、地球といのち

5 いのちを育てること：人の親子、動植物の親子、飼育や栽培

6 いのちのかけがえのなさ：死について、自殺・他殺

7 いのちには同じものはないこと：個性、人間の在り方

8 いのちのもつやさしさ・あたたかさ：文学作品など

9 いのちに差別はありえないこと：男女差別、障害者差別、部落差別、人種差別、 学歴差別など

10 いのちをおびやかす奪うもの 戦争、核、原発、公害、貧困、病気とのたたかい

11 いのちをささえる仕事、育てる仕事、守る仕事：仕事の価値観や仕事をとおして自ら

の生き方について考える

12 いのちを生かしきること：自分の在り方について考える

13 いのちのあるものにふれる 自然にふれる、動物にふれる、人にふれること

P16 子どもたちに今必要なものは何か（生き方を学ぶ性教育の課題）

(2) 生や死についての教育の大切さ

子どもが命について安易に考え死にいたる実感が乏しく命を軽視する傾向がある。また、核家族によって年老いた親族との同居が少なく、老いや死についての実感が乏しく、コンピュータ等にみられるように実体験の不足がある。

P50 自己が育つ援助について 梶田 叡一

（絶対矛盾の自己同一について）

相矛盾する二つの要素、この二つの相矛盾する要素がセットになって、初めて一つの具体的アイデンティティー「自己同一性」、一つの固有の性格をもった何かが成立する。つまり、一つの原理だけで何かが進むのではなくて、矛盾する二つのものがセットになって初めて、ある一つの事柄が成立する。こういうことを「絶対矛盾の自己同一」と言うわけです。私は、多くのものがそういう性格をもっていると思います。

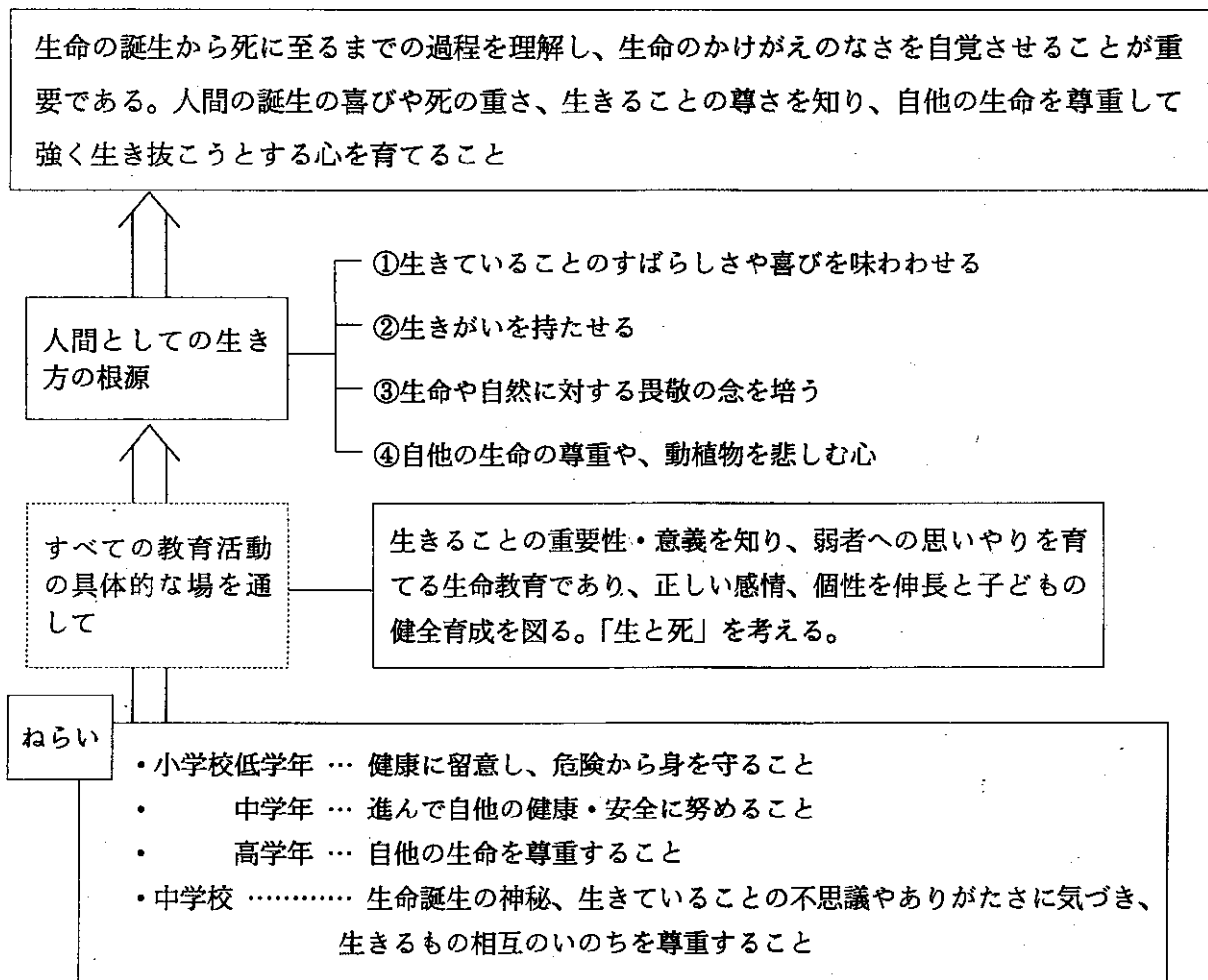
生き方を学ぶ性教育

—— 理論・資料編 ——

兵庫県教育委員会

生命の大切さを実感すること

「生命を尊ぶ」ということは、要するに動植物や人間の生物学的な生命を大切にすることとともに、その生命をもつ不可思議さを知り、畏敬の念をもち、生きとし生けるものを悲しみ、何にもまして大切にすることを意味するといえる。一見とるに足りないような、小さな動植物の中にさえ働いている生命の不思議さ、すばらしさに心を寄せ、いつくしみ、大切にすることは、やがては自己自身の生命のすばらしさ、かけがえのなさ、尊厳についての自覚につながる。更にそれは、自分と同じ尊厳性をもつ他の人々の生命や人格を尊重することへと通じていく。



＜生命の依存性＞

自然界の生物は、すべて他の生物の犠牲に依存して自己の生命を維持している。「食物連鎖」は、生物が単独ではできないことを如実に示す事実であるとともに、生命の等価性と連続性や、生物が自然の大きな力によって生かされている事実を実感させてくれる。

生と死について

生と死は表裏一体の関係であり、生を取り扱えばその裏として、死を考えることになります。ただ、大切なことはよりよく生きていくこと、生命は大切なものでかけがえのないものであるという視点に立って「生と死」を考えなければいけないということです。

「生と死」の教育を行う場合の大切なことは、子どもたちの発達段階にそってその問題を取り扱わなければいけません。でないと幼いときや思春期の心は不安定で、死を考えさせる時期やその方法は、極めて慎重にすべきということです。ただ大切なことは、家族の中で大切な人を失ったり、大事な友人を失った時にかかるストレスは非常に大きなものがあります。この悲嘆をのり超えていくのには、以前から小さな喪失体験をどうのり超えてきたかに影響を受けます。私たちは、小さい頃から、例えば引っ越しでふるさとの友人を失ったり、失恋したり、大事にかけていたペットを失ったり、大きな病気にかかったり等の体験をとおして、たくさんの小さな喪失体験を持っています。この一つずつの喪失をじょうずにのり超え、立ち直っていくことで、人生でもっとも大きな喪失をうまくのり超えられるようになるのです。そのことが「生と死」を考えることへつながっていくのではないのでしょうか。

では、「生と死」の内容についてみる前に、アルフォンス・デーケン氏が示した4つの「死の準備教育」レベルと4つの死について見てみましょう。

1 死の準備教育の4つのレベル

段階	レベ ル	内 容
1	知識伝達のレベル	死にかかわる学術的な研究成果の多様な専門知識を学ぶ
2	価値解明のレベル	自分の価値観の見直しと再評価を行い、生と死に関するしっかりとした価値観を身につける
3	情緒及び感情的なレベル	死にたいしていただいている過度の不安や恐怖を自覚し、克服する
4	技術習得のレベル	死にゆく患者とのふれあいを通じて、具体的な技術の習得を行なう

2 四つの死について

段階	死の 種類	内 容
1	心理的な死	生きる意欲を失ったら、それは心理的に死んだ状態といえる
2	社会的な死	人間は本質的に社会的な生物ですから、家族から見捨てられたとか自分から友人にも会いたくないなどというように、人間的なふれあいを求めなくなれば、それは社会的に死んだような状態です
3	文化的な死	人間は文化的な環境にあってこそ、人間らしい生活が営めるのだともいえます。いっさい文化的なうらおいがなくなってしまうたら、もうそれは文化的には死んだ状態と同様です
4	肉体的な死	ふつうの意味での死

では、次に「生と死」に関する内容・目標について見てみましょう。

「生と死」に関する内容

目的	分析内容	上位	認知	情意	行為
		目標			
1 生命尊重に関すること	死の不可避性に気づき、今の自分以外の存在の命のかけがえのなさを感じ得る		生と死の基礎的知識を理解する	生と死に関する価値観や健全な態度を形成する	ライフサイクルの各段階において生と死をめぐる問題に、具体的に適切な対処ができるようになる
2 生き方に関すること まず、死を正しく受け入れることができるようになるにつれ、生の意味をとらえ、今の大切さに気づくようになる。そこで今を充実させて生きていくことが期待できる	(1) 死を正しく受け入れる		<ul style="list-style-type: none"> 死の医学的な内容（肉体的過程、特徴、死因等）を知る 死に関連する慣習文化（死体の取り扱い・葬儀等）を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> 死にまつわる恐怖を取り除くようになる 死を正しく受け入れるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> 現実の死と架空の死を区別できるようになる 死を正しく受け入れて、適切に行動できるようになる
	(2) 生の意味をとらえる 生きることがいかに素晴らしいかを知る		すべての生き物は死ぬことを理解すること	生きることがいかに素晴らしいかということを知る	生命を大切に、充実して生きるようになる
	(3) 充実して生きようとする 人生の重要な選択の時に、将来を十分に展望した判断をするようになる		すべての生き物は死ぬことを理解すること	生きることが、生命の重要性に気づくようになる	人生の重要な選択の時に将来を十分に展望した判断をするようになる
3 人格に関すること	(1) 健全な人格形成の育成を図る 死について知ることによって死にゆく人の悲しみ、悲嘆にくれる人々の気持ちを知るようになる		死は悲しいことであることを理解する	死を正しく受け入れるようになる	死をめぐる悲嘆に対処することができるようになる
	(2) 自己を再び発見する		死をめぐる問題（死の定義・基準・遺言書・死ぬ権利・安楽死等）を理解する	自分以外の存在に対して思いやりの心を持つようになる	死をめぐる諸問題に対して各自の価値観に応じて自分が対処できるようになる
	(3) 思いやりの心を育成する 生命の尊重としての弱者への思いやり		加齢や老人について理解する	<ul style="list-style-type: none"> 生きること・生命の重要性に気づくようになる 老人を思いやる心を持つようになる 	<ul style="list-style-type: none"> 老人を大切にできるようになる 生命を大切に、充実して生きるようになる
	(4) 価値観を形成できるようになる 生や死という大切な問題から逃げるのではなく、自ら決定しうる人間、固有の価値を創造できる人間を生み出すこと		死をめぐる問題（死の定義・基準・遺言書・死ぬ権利・安楽死等）を理解する	死をめぐる問題に対して、各自の価値観を形成する	死をめぐる諸問題に対して、各自の価値観に応じて自分で対処できるようになる
4 予防に関すること	(1) 悲しみ・死への準備をする 死がいつ訪れても、その時あわてふためかないように、生きるための学習の中で、死への準備をそれぞれの年齢や環境に応じて導入し、また日常生活の中でも、そうした危険状況に対応できる精神訓練をしておく必要がある		死の心理的な内容（死にゆく人の心理段階、悲嘆のプロセス援助の必要性等）について理解する	死にゆく人やその家族、悲嘆に苦しんでいる人々の気持ちを大切にできるようになる	死をめぐる過程に適切に対処し、他人にも援助できるようになる
	(2) 自殺を予防する 充実して人生を生きることが教えるという積極的な中で、自殺の予防にも役立つ		自殺について理解する	自殺予防の可能性と意義について関心を持つようになる	自殺企画者に早く気づき、予防・援助できるようになる
5 平和に関すること	戦争で生命が失われることに対する生命尊重を考える		戦争は大量の死傷者をもたらすことを理解する	戦争を憎み、平和の価値を尊重するようになる	平和のための行動に参加し、自分の役割を果たすようになる

生命を尊ぶことについて（生命尊重の具体的な目標）

項目	目 標	小 学 校			中 学 校
		低 学 年	中 学 年	高 学 年	
見つけよう、生命を尊ぶ心	<p>自然界には、人間以外にも、いのちあるものが数限りなく存在している。子どもたちが、いのちを大切にすることをしっかりと身につける必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校低学年 - 限りないいのちに気付くこと ・小学校中学年 - えいえいと生き続けようとする姿に感動する ・小学校高学年 - 生命はかけがえのない大切なものであると感得すること ・中 学 校 - 人間の力を超えたものに畏敬の念を持つこと 	<p>身近な生物の生活の営みの中に生命を発見し、むいとおしむ心をもつようになる。</p>	<p>生命の誕生に会う時、子どもたちは生命の神秘さ、すばらしさに感動する。</p>	<p>自然の中の生ずべき物は、短い一生の中で、それぞれの役割を果たしている。自分を最大限に有意義なものが、大切である。</p>	<p>自然を愛し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに對する畏敬の念を深めるようにする。</p>
大切にしよう、生命を尊ぶ心	<p>自分でつかまえてきた生き物の世話をすることや、友達と真っ黒になって遊ぶことが、今の子どもたちには少ない。死んだかぶと虫をこわれたおもちゃ同様に扱うなど、生命に対する見方や考え方に深まりがなく安易な態度が生じるのである。</p> <p>子どもたちの生活のなかに、生命は大切だという実感を得ることができ体験の機会が失われてきていることも、その原因と考えられる。</p> <p>しかし、生命を尊ぶ心や、生命への畏敬の念は、子どもたち一人一人の心の中にひそんでいると考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校低学年 - 生命を尊ぶ心や生命への畏敬の念を子どもたちの心の中に芽生えさせ、大きく育てること ・小学校中学年 - 生命は何ものにもかえがたく人間の力ではどうしても及ばないところがあることに気付かせること ・小学校高学年 - 共に生きる喜びや生き抜こうとする心情を子どもたちに育てていくことを大切にする ・中 学 校 - 生命の尊さについて自他を通して理解すること 	<p>生物を飼育する体験を通して、生き物と共に生きる喜びを大切にしなければならないこと気付かせる。</p>	<p>生き物の死を見つめることにより、生きることの意義に気付かせる。</p>	<p>どんな小さな生き物にもある大切な生命を大切にする心を育てる。</p>	<p>生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重するようにする。</p>
高めよう、生命を尊ぶ心	<p>生命を尊ぶ心や生命に対する畏敬の念は、ときには偶然の機会に感得することがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校低学年 - 生命をいとおしみ、大切にしている行為に喜びを感じることに ・小学校中学年 - 自己の生き方の目標とし、積極的に価値ある行為を生活の中で積み上げること ・小学校高学年 - 中学生の生き方を自分の行為から広く周りの人たちにも広げていくこと ・中 学 校 - 豊かな人間性を日々の生活の中に実現することを目指すこと 	<p>美しいものに触れすがすがしい心をもつ。</p>	<p>誕生日を祝う親の気持ちを考え、その願いにこたえ、家族のために役立つ心を養う。</p>	<p>厳しさに耐え自ら大切に育てることを美しさに気付かせる。</p>	<p>人間には弱さや醜さもあるが、それを克服する強さや気高さを信じて人間として生きることに喜びを見いだすように努める</p>

学校教育の中で「生と死」についてどのような取り組みができるのでしょうか。

生き方を学ぶ性教育では、生命の尊重の中でその内容を取り扱っていますが、どのような取り組みができるのか、生命を尊重する観点からまとめると次のようになります。

項 目	取 り 組 み の あ り 方
1 いのちはつながりあっている ということ (横のつながり — 空間 縦のつながり — 時間)	横のつながり：いのちを食べていのちは生きていること、食物連鎖、生物のささえあい 縦のつながり：地球の歴史、生命の発生と発展、人間の歴史、動植物の世代交代
2 いのちの誕生	生命誕生のドラマ、生きあう性
3 いのちの一生	生まれて、育て、死ぬいのちのこと 若いいのちと老いるいのちのささえあい
4 いのちの不思議さ	いのちのメカニズム、地球といのち
5 いのちを育てること	人の親子、動植物の親子、飼育や栽培
6 いのちのかけがえのなさ	死について、自殺・他殺
7 いのちには同じものはないこと	個性、人間の在り方
8 いのちのもつやさしさ・あたたかさ	文学作品など
9 いのちに差別はありえないこと	男女差別、障害者差別、部落差別、人種差別、学歴差別など
10 いのちをおびやかす奪うもの	戦争、核、原発、公害、貧困、病気とのたたかいなど
11 いのちをささえる仕事、育てる仕事、守る仕事	仕事の価値観や仕事をとおしての自らの生き方について考える
12 いのちを生かすこと	自分の在り方について考える
13 いのちのあるものにふれる	自然にふれる、動物にふれる、人にふれること

「生き方を学ぶ性教育を推進するにあたっての課題」

生き方を学ぶ性教育が必要な理由として次のことが考えられます。

- (1) 普遍的な価値体系・規範となるものがくずれていっているのではないのでしょうか。

例：テレクラや援助交際に見られる無規範的な状況や薬物などの乱用などの問題

- (2) 性的なエネルギーや欲求といったものをコントロールすることができなくなっているのではないのでしょうか。

例：安易な考えによって、安易な行動に走って取り返しのきかない大変な事件をおこしたり自分で自分を見直したり、自分の中のエネルギーをコントロールすることができない状況

- (3) だれかの生き方に感動するとか、人間としてのいろいろな生き方があるとか、小さい時から自分できちんと判断できるように育てられていないのではないのでしょうか。

例：親や教師が物分かりのよいことばかり言って、その物分かりのよさが結果的に基本的な育ちのゆがみやひずみを生み出している状況

「なぜ、今生き方を学ぶ性教育なのか」

1 教師に求められていること

(1) 子どもたちは「成長しつつある」存在であるという認識を持つこと

社会の変化にともなって子どもたちの意識や行動も変化し、子どもたち固有の文化や生き方があるなかで、親や教師はこれらを的確に理解できないまま、自分の価値観の中に子どもを閉じ込めていないか。

(2) 教師と子どもの人間関係はきちんとできているか省みること

子どもたちは固有の社会をつくり、物に恵まれ、慌ただしい生活の中でくらしているが、教師も同様に慌ただし生活の中でお互いを理解することなく、単に授業する側、授業を受ける側といった、人間関係が希薄になっていないか。

(3) 子ども固有の内的世界を理解する必要があること

子どもたちは、流行に敏感で子どもたちの間ではいろいろなものが流行する。例えば茶髪、ルーズソックス等の風俗は、短絡的に非行と結びつくものではないが子どもが自由に自己表現しようとする機会ととらえ、子どもが持っている固有の内的世界を理解することが大切である。

2 子どもに求められること

(1) 人間の性に関する基礎基本を

今日の性に関する意識や価値観の多様化が進むと共に、中学生や高校生を取り巻く社会環境が急激に変化し、生徒の身体的な発達や性的成熟が早くなっておりこれに伴い、生徒の性に関して特別な指導を要する行動も増加している現状もある。また、自己存在感の喪失が現在の子どもの特徴の一つといえる。携帯電話や、ポケベルやプリクラ等は自分の存在感の主張であり、自分が一人でないことを確認する手段でもある。誤った自己存在感のアピールが援助交際や薬物乱用となる。

(2) 生と死、生命の大切さを

今日の子どもたちの言動を見ると、自他の生命を軽視した行動が目立っている。例えば、家族や友だちのいさかいに、死によって抗議する子どもとか、ささいな失敗や困難に耐えることができずに、死を選び解決しようとする子どもなど、死を安易に受けとめている例も少なくない。また、いわゆる、いじめに見られるように、相手の立場や気持ちを思いやる心に欠けて、友だちを死に追い詰めてしまう例もある。このような生命を軽視する風潮は、様々な悲劇や社会的問題を生む結果となる。

(3) 自己を見直し、自己をコントロールする力を

思春期には、性衝動や攻撃性などが旺盛になり、子どもたちを内側から強く揺り動かすようになる。人間である限り、私たち大人にも自分でも認めたくない醜い感情というものがあり、子どもたちにも親や教師に知られたくない秘密がある。

このような感情をどのように受け入れ、処理していくかということが生きていく上で大切なことである。また、どんな社会にもダークサイドは存在する。そのダークサイドに気づいたとき、自らの力でどう対処していくかが、生きる力をつけていく上で大事なことである。

生き方を学ぶ性教育の推進

生き方を学ぶ性教育

- 自己教育力を育てること —— 自己認識・自己概念
- 豊から心を育てること —— 認識する心・感動する心・思いやり
- 生命の大切さを実感 —— 生と死に関すること・生命を尊ぶ心
- 性に関すること —— 基本的な性に関する内容を学習

『生き方を学ぶ性教育とは』

生き方を学ぶ性教育とは、性教育という1つの学習を窓口にして、生き方を学ぶ教育である。そのためには主体的に判断できる場面をつくること、自らをよりよくするためにはどうするのかを考えさせる教育活動を展開しなければならない。

そして、実生活の場で自己コントロールし、生命の大切さを実感して自ら進んで思いやりの行動がとれることが重要である。

「生と死」について

わたしはいつまでも生きていけるわけではない、ということを忘れようとしていっしんにわたしは生きている、とだけ考えようとした。けれどもまるでだめだった。わたしは生きている、と考えれば考えるほど、この命はいつか終わる、という考えも浮かんでくる。その反対でも同じだった。わたしはある日すっかり消えてしまう、と強く実感して初めて、命はかぎりなく尊い、という思いもこみあげてくる。まるで一枚のコインの裏と表だ。ソフィーはこのコインを頭の中でいつまでもひっくり返していた。コインの片面がくっきり見れば見えるほど、もう片面もくっきり見えてくる。生と死は1つのことがらの両面なのだった。人は、いつか必ず死ぬということを思い知らなければ、生きていることを実感することもできない、とソフィーは考えた。そして、生のすばらしさを知らなければ、死ななければならないということをじっくりと考えることもできない、と。ソフィーは、祖母が自分の病気を告げられた日に、似たようなことを言っていたのを思い出した。「人生はなんて豊かなんでしょう、今ようやくわかった」たいていの人が、生きることのすばらしさに気づくのが病気になってからだなんて悲しい。

ソフィーの世界「哲学者からの不思議な手紙」から
ヨースタイン・ゴルテル 著 NKH出版

生き方を学ぶ性教育の4つのポイント

ポイント1. 性的エネルギーは非常に強いが、人間が生きていくための土台となるものでありこれを押さえ込むのではなく、うまくコントロールしていかなければならない。

例えば、性交の問題をタブー視するのではなく、あるいは単なる生殖のメカニズムの話に局限することなく、男性と女性の間の付き合いの一局面であることを学ぶ。これと同時に男女の交際を危険なもの、できれば避けるべきものといった暗いイメージで見ることなく、愛と責任を基調としつつも、心楽しい明るいものとして認識するような性教育を目指す。

ポイント2. 生き方を学ぶ性教育は、生命の誕生の学習を通して生きることや生命の大切さを学習するとともに、生きとしいけるものは必ず死を迎えることから、死がもたらす悲しみやつらさ等の喪失体験を学習するなど、生と死を表裏一体でとらえる性教育を推進しなければならない。

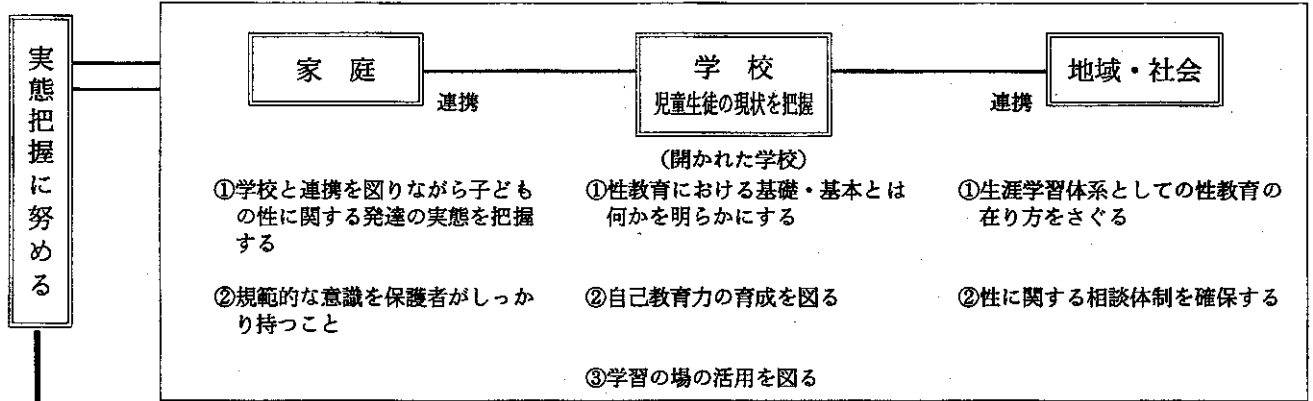
ポイント3. 性の問題を、思春期に直面する厄介な問題、できるなら避けて通りたい問題として認識するのではなく、人間であるかぎり誰もが、しかも一生にわたって直面せざるをえない本質的な問題であることを学ぶ。

若い頃の男女交際も、老人同志のお付き合いも、この意味で自然かつ当然のことであり、思春期以降も長い人生を通じて誰もが考え、工夫し、解決していかなければならないものとして性に関わる要求の問題を認識することを目指す。

ポイント4. 男女の関係を、保護する人と依存する人、収入を得る人と家庭を守る人といった伝統的で固定した性役割観を通じて見るのではなく、男女2人への対等互惠の交際を通じて新たに作り上げていくべき役割分担という視点から自由な形で考えていくことを学ぶ。

生き方を学ぶ性教育を推進するための基本構想

三者一体の取り組みであること



実態把握に努める

生き方を学ぶ性教育を推進にするにあたって

実践

	自己認識・自己概念をしっかり持つこと (自己実現を図る)	豊かな心を育てる (内面世界が耕されて深く活性化する)	生命の大切さを実感すること (生命をより大切なものとして死を扱う)	校種別 段階
基本的レベル (性教育の基本)	<ul style="list-style-type: none"> ・男女の体の違いを通して、発達・成長の基本を押さえる。 ・自分自身について多面的に理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・読書の習慣を持つ ・社会的対人的な環境構成 	<ul style="list-style-type: none"> ・生命をより大切なものとしてとらえる機会として死を取り扱う 	小学校の段階 低学年 高学年
自己をコントロールする	<ul style="list-style-type: none"> ・自らを律しつつ他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力をつける。 ・自分はどのような在り方・生き方をしていけばよいかといった自己のあるべき姿について、柔軟ではっきりした方向性のあるイメージを持つようになること 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己対話の習慣を持つ ・自己統制能力の育成を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒一人一人が生きることによって喜びを見出せるようになる 	中学校の段階 1年生 2年生
価値観や内的自然の構築	<ul style="list-style-type: none"> ・性に対する正しい価値観と内的自然の育成を図る。 ・自分自身は過去から未来へと、一貫して存在し続けるものであるにせよ、現実存在し機能しているのは、「今」「ここ」の自分ではないということを実感し、理解するようになること 	<ul style="list-style-type: none"> ・心身の機能がフル回転するような没頭の機会をつくる 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの生を充実することによって、他の人々や生き物への配慮をすることができるようになる 	中学校 3年生 高等学校の段階

生き方を学ぶ性教育の実践